



1984年(昭和59年)
2月号(No.464)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- カンチエンジュンガ縦走計画……………(1)
年次晩餐会会長挨拶……………(2)
故折井健一氏に捧ぐ……………(2)
故林和夫さんとの出会い……………(3)
山の本……………(4)
「日本登山記録大成」の完成
藤田弘基写真集・ヒマラヤの花

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜 10時～20時
水・金曜 13時～20時

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

第3回東北ブロック集会

日時 四月二十一日(土)～二十
二日(日)
会場 福島市野地温泉相模屋旅館
山行 野地温泉―安達太郎山―奥
岳スキー場(二十二日)
主催 福島支部

お知らせ電話

234 六六五九

カンチエンジュンガ縦走計画

鹿野 勝彦

本計画は、日本山岳会創立八十周年記念事業の一環として、一九八四年春に、ネパールヒマラヤ東端に位置する世界第三位の高峰、カンチエンジュンガ主峰と、それにつらなる主要な峰々、すなわち南峰(八四九一m)、中央峰(八四七八m)、主峰(八五九八m)、西峰(八五〇五m)を、日本山岳会、ネパール王国山岳協会の合同隊によって縦走することを目的とするものである。

カンチエンジュンガ山群は、世界でも最も秀麗な山容をほこる高峰として、古くより世界の登山家の注目を集めてきた。その最高峰、主峰は、一九五五年にイギリ

ス隊により、西峰は一九七三年、京大隊によって初登頂され、また南峰、中央峰も、それぞれポーランド、スペイン隊によって登頂された他、いくつかのバリエーションルートからの記録も残されている。しかし、南峰から主峰を経て西峰に至る、標高八〇〇〇mを超える高度での、直線距離三kmに及ぶ稜線は、いまだに人をよせつけず、世界最高の縦走ルートとして未踏のままである。

ヒマラヤの高峰における縦走計画としては、一九五一年、インド、ガルワールヒマラヤのナンダ・デヴィ主峰、東峰の縦走を試みたフランスのデュプラらのそれが、嚆

矢といえよう。当時としては破天荒ともいふべきその試みは、デュプラら二人が行方不明となるといふ悲劇的な結末を遂げたが、この課題は、一九七六年、日本山岳会、インド登山財団の合同隊によってなしとげられた。その後、ヒマラヤ高所での縦走は、ダウラギリII・III・V峰を結んで交叉縦走を成功させたカモシカ同人隊、ガッシャーブルムII・III峰間を結んだポーランド隊などの例があるが、今回のカンチエンジュンガ山群の主要な四つのピークを結ぶ計画は、標高八五〇〇m前後の超高山での、三日間にわたる縦走という、ヒマラヤ登山の新しい領域の開拓を目指す試みである。

登攀ルートはカンチエンジュンガ山群の西面、ヤルン氷河側にとり、ベースキャンプ(標高五三〇〇m)から第三キャンプ(標高七三〇〇m)までは、イギリス隊の初登ルートに従う。ここより隊を

三隊に分け、縦走隊は南峰西壁から南峰直下に最終キャンプを設けて、中央峰・主峰を経て西峰にむかう。サポート隊は、中央峰・主峰のコル、及び主峰・西峰のコルに、それぞれ最終キャンプを設けて縦走隊をサポートする。ベースキャンプ建設は三月下旬、縦走の実施は五月上旬から中旬にかけてを予定している。

ヒマラヤの高所での縦走においては、縦走隊自身が克服しなければならぬ困難はいくつもの点があるが、同時に、縦走隊を確実に収容し、出発させる役割をになうサポート隊の行動の占める比重が、その成否にとってきわめて大きい。特に本計画においては、同時に八〇〇〇mを超える高所で行動する複数の隊が、一つの目的にむかっ

て、緊密に協力しあいながら、個々に最大限の力を発揮するといふ、真の意味でのチームワークが試されることになる。同時に、少なくとも三日間を、八〇〇〇m以上で行動することを前提とするこの計画においては、数少ない好天期間を、確実に把握し、すべての隊員の体調を良好な状態で維持してゆくことが、必須の条件となる。

なお、隊はハンググライダーを携行し、主峰・西峰のコル付近、標高八〇〇〇mを超える高所からのハンググライダー飛行を試みる。高所からのハンググライダー飛行は、近年注目されている新しいスポーツの分野であり、ヒンドウクシユのノシャック山頂や、カラコルム、K2の七九〇〇m地点からの飛行などの記録があるが、八〇〇〇m以上からは、従来試みられたことがない。この成否も、縦走と同様、天候と体調を的確に判断しうるか否かにかかっているといえよう。

すでに準備も順調に進んで、二月末までに全隊員が出発できることになった。これまでの各位のご支援に感謝するとともに、一層のご助力をお願いしたい。

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

皆さん、こんばんは。ここに日本山岳会恒例の年次晩餐会を開くにあたりまして、会長として一言御挨拶申し上げます。

本夕の会は、毎年春に開かれます総会とともに、本会の大きな行事で、総会が会の運営に関する諸事項を議しますのに対し、会員の懇親の場として古い友、新しい友相待つて、愉しい一夜を過ごすのが、その趣意と存じております。ここから見渡しますと、北は北海道、南は九州と、方々からお見えになっておられます。前の席には元会長の方々や会のためお尽くしくださった古い会員の方々、また名誉会員や永年会員のお顔も見え、新しく入会された方々も来ておられます。このように老若を問わず、男女ともども多勢が御参会頂けますことは、本会ならではのことであり、まことにご同慶に堪えぬところでございます。

さて、まず最初に会の現況を簡単に申し上げますと、この十一月末で一番新しい会員番号は九四三二番、在籍会員数は三七九八人で、中に新入会員一五五人を数えますが、退会者も一四人いました。ここに悲しむべきことは物故会員が二八人居られますことで、中に名誉会員辻村太郎先生、加藤泰安さん、前副会長の折井健一さん、山で亡くなられた大塚武北海

年次晩餐会会長挨拶

佐々 保雄

道支部長方がおられます。またエベレストでは昨冬加藤保男、小林利明の二会員、今冬は禰博信会員を失っております。これらの方々に対しましては、後刻改めて御冥福を祈り、黙祷を捧げたいと存じます。

一方この年次晩餐会を機会に、本会には会に対し貢献された方を名誉会員に推させて頂くの恒例といたしております。今年は評議員会におきまして慎重審議の上、村井米子さんを選ばせて頂きました。同会員は一九〇一年のお生まれで、大正年間のお若い時から山

登りを始められ、婦人登山、冬スキーの草分けの方であります。その足跡は日本の南北に及ぶ所なく、特に大正十二年の穂高槍峯縦走は婦人として最初の試みと伺っております。本会においては婦人懇談会をつくられ、婦人の登山の指導に努められましたし、また近年は国立公園協会や自然保護協会の役員として、自然保護運動に挺身しておられます。本会は村井米子さんが名誉会員に十分ふさわしいものと考え、後ほど同会員に名誉会員章を差し上げたいと存じます。

また本夕、図らずも御来日中のキャプテン・コリーをお招きできましたことはたいそう光栄のこととございます。コリーさんは現在インド登山財団の副会長として、日本の登山隊はいつも大変御世話になっております。ここに改めて感謝申し上げます。

氏は一九六二年及び六三年のインド・エベレスト隊の隊長として、同隊を成功に導いた方でございます。ここに記念品を贈呈するとともに、拍手をもってコリーさんに歓迎の意を表したいと存じます。本会では会員の動向や会に対する意識を窺うため、本年三項目にわたるアンケートを出しましたところ、総発送数三九〇〇通の中一七五五通の回答を頂きました。約四五％に

なりませんが、この種の回答率としてはむしろ高い方の由で、会員の大会に對する関心度の反映と存じ、大変喜ばしく思っております。会報「山」にその集計が掲げられました。本会の運営や将来のために参考になるべき点が多々ございます。その中には「山」を「全部読む」が約五〇％、「興味ある所だけ読む」が約四〇％、併せて約九〇％と、全会員のつな

がりに大きな意義を持つてゐるものとわかり、同誌の今後に資する所多大でした。ほかに一、二だけを取り上げて

故折井健一氏に捧ぐ

韓国山岳会

孫慶錫

「雪岳山の紅葉は美しいでしょう。十月の中旬には、かねて登りたいと思つた雪岳山に一緒にどうでしょう」とさそわれた。この手紙の返事を出し、訪韓の日を待っていた矢先に、突然畏友関口周也兄より、折井さんの急逝を国際電話で知らされ、また松永敏郎兄からはその詳細を聞き、ただ驚愕の一言につぎる思いである。

私の二度目の訪日が一九六〇年で、公用で東京出張中、当時お茶の水岸記念体育館にあった山小屋風の日本山岳会のルームで、折井さんに逢つたのはじめてであつた。その翌日、「山と溪谷」の随想にひかれて山登りを始めた話から、マッキンレー遠征についてなど、田部重治、三田幸夫、日高信六郎、交野武一の諸氏と折井さんを招待し、麹町のあるホテルで一夕を楽しんだ縁が、私と日本山岳会とのつきあいの始まりとなつた。二十余年の歳月が、数々の思い出と尽きぬ語り合ひを、東京とソウルの燈の下で結んだのであつた。それまでは、日本は近くて遠い国であり、韓国山岳会との交流は閉ざされていた。私が韓国山岳会の常務理事であつた当時、初

めて今は亡き松本の小里さんを紹介され、紅葉の美しい上高地から西穂高へ登つた。それから五年後の一九六五年、韓国山岳会としては最初の訪日登山隊が、穂高山群を西穂から、岳沢から、また濁沢から集中登山をし、槍まで縦走したのも秋であり、常念を経て上高地に下りた時は、小梨平に枯葉が敷かれていた。

ちょうど日本山岳会の六十周年記念日に当り、椿山荘での日本山岳会の諸氏との交歓会も意義深いものとなつた。それから西は九州支部から、北は北海道の室蘭まで、長野、松本はもちろん、甲府の百瀬舜太郎氏、神戸の故津田周二氏、京都の藤本高嶺氏、そして横有恒氏をはじめとするマナスル隊員諸氏等々、数えきれないほどの友人が、東京とソウルの往き来しながら、山の話にふけた。おかげでおたがいに連休と週末は出迎え、見送りの二十余年となつたのである。これがすべて折井健一さんから「よろしく」の紹介状での交流であつた。

ソウル大山岳会員をつれて、穂高、南アルプス、また富士山、丹沢、秩父の山々と十余回の私の訪日には、毎回必ず一夜は折井さんの私宅で、奥さんの手作りの料理を楽しんだのであつた。たびたび年次晩餐会にも招待され、JACCの「山岳」と「会報」も欠号なく書架を飾り、とうとうJACCにも

みますと、会員の年齢層が四〇才以上六〇才までの方が五七・一%を占め、三〇才以下の方は僅かに三・五%と極めて少ない。因みに女性会員も僅かに七・二%と、意外に低いのも目に止まります。この若年会員の少ないことは、会の将来のために心細い限りと申せます。この青年会員の増強については特に皆さんの御留意を奮起したいと望んでおります。

また本会は地方支部が数にして十九、会員数の六割近くを占めております。本部と支部との交流や支部の発展はかねて私の念願として参った所でございますが、その強化の方法の一つとして、東北の各支部が地区集会を毎年もって横の連絡をとり、一体感を強めているような方向も一つのあり方だと思います。各支部が地方毎にブロックを作り、共に協力して登山を始め諸行事を盛んにすることはいか

がと考えております。

一方、日本の登山界の近年の発展は目を見張るものがあります。我国ほど海外に多くの登山隊を出している国はないようだし、また国内の山々のにぎわいも皆さん御承知の通りであります。このように登山が盛んなことは、同好の士がふえる点でも、国民保健の上でもまことに喜ばしいことです。が、同時におびただしく、いわゆる「観光公害」をもたらししていることは憂慮に堪えぬところ

ことに海外の山地を汚す筆頭にいつも日本隊が挙げられる汚名は、是非拭かねばなりません。先般、本会の自然保護委員会では「山を美しく保つ為」と言う手引書を出しましたが、会員におかれては、いつも先頭に立つて山の浄化に努められることを期待しております。先程のアンケートの中の本会の「活動の強化」の中で「自然保護」が三〇・九%を占めておりましたのは、まことに頼もしい限りで、この傾向をいつそう高め、実践して参りたいと存じます。

一方、登山のいわゆる近代化は決してこれを否むものではありませんが、同時にあまりに商業化し、ショウ化して参りました現状を見ますと、果してこれでよいのかと首を傾げざるを得ません。本会がこうした傾向に対してどう対処するか、皆様に一考をわずらわしたいところであります。

本会は御承知のように一九〇五年に創立されましたので、来る一九八五年、即ち再来年の昭和六十年には八十周年ということになります。これは決して大きな節目ではありませんが、そのうち迎える百周年への一つの土台として、それなりの記念行事ないし事業を行うことは意義のあることと考え、先般山田副会長を委員長とする委員会を発足させました。

その中には登山行事として、カンチエンジュンガの縦走がござい

ます。これは八千m級の峰々のトラバースとして残された大きな試みの一つで、本会の記念行事として恥しくないものと存じますし、同時に本会の将来を担う若手を育成するものとして、その成功を大いに期待いたしておるものでございます。

また、八十年をスプリングボードとした事業としての山岳博物館。これは場所や経費の面で一朝一夕のことではありませんが、記念行事の登山に関する展示会の資料を核として、多くの登山資料を今のうちに集めておきたいと存じております。皆さんの大きな御援助を得たいと存じます。

しかし、これらの諸事等を行うにつきましても、いわゆる「先立つもの」がありませんと何とも動きがとれません。そのための「基金」を募る組織も八十周年の委員会と並んで発足いたしました。これについても会員の皆さんの御理解と御協力なくしてはできぬこととあります。何卒よろしくお願い申し上げます。

以上、会の近況や将来の展望、並びに希望など申し上げましたが、何はともあれ、ここに久しぶりに会員が一堂に会し得たことを喜び、ともに歓を尽してこの一夕を愉しく過ごしたいと存じます。

入会したが、これまたすべて折井さんとの良運で結ばれたのである。菊の香りを踏んで逝かれた折井さんの仏前に、ただ御冥福を祈るのみである。

故林和夫さんとの

出 会 い

坂江 善治

いまは、そのその時からすでに半世紀が流れている。当時勤人で、前年小樽に赴任した私は、春が来、冬中の積雪をまとい一段と丸味を帯びた積丹岳を目指して、余市港から美国へ、泊りは山麓の海田牧場のお世話になっていた。

夕食を頂いて一息入れていると、どやどやと数人でやって来たのは北大の学生さんで、仕切のな隣室に陣取った。連中は賑やかなものだったが、当方は独り旅の味気なさを存分にした。翌日は、前日船上から、いぶし銀の置物よろしく見上げた積丹岳の頂きで散々に降られ、ただ短スキーを美国の街近くまで履いたのが、収穫といえは収穫であった。

戦後、会のルームがお茶の水に復活したので再々訪れていたある日、私の肩を叩く見知らぬ人があった。「貴方は昔積丹岳で一緒になった方ですね。ぼくはあの頃北大にいた林です」当時の私は、林さんが若溪堂から出した「登山の

ためのスキー術」の一本を山スキーの教本にして、氏の説にぞっこん惚れこんでいた時代だったが、往時の積丹岳の学生さんと、この本。著者と結びつけるのには聊か時間がかかった。

「あの時の仲間の殆どがベテガリで死にましたよ。たまたまぼくは所用で行けず命拾いしたようなもので……。こうして山登りを続けているとまた何処かでお会いするのですよ。積丹の時は泊代と船賃もただで儲けましたね」と、互に顔見合せて苦笑した。そんなことで、一寸しんみりした十数年振りの再会でもあった。

最近私は、ヘルベチア小屋創建間もない頃の写真を伸してみて、五十二年に出た「北海道の山と谷」に掲出の同小屋のものと聊か様子が違うので、このことを林さんに訊ねるため電話したが、これも前記のルームでの出会い以来既に二十余年が過ぎていた。

五十七年の年次晩餐会でお会いした時は、肩書の付いた二枚の名刺を出され、遊びに来てくれとのことだった。「貴方はまだ若い。ぼくはもうこんな具合で」と頭の方へ手をやっておられたのだが。このところ、たまたま職場を同じくし、山登りにも永らく教示に預った大塚武さん、続いて私には因縁めいた林さんとも、思いもかけぬ出来ごとでお別れとなり、なんともの淋しい限りである。

新刊の本

山の紹介

「日本登山記録大成」全二十巻が発行された。日本アルプスと富士山を中心とする明治以降現在に至る主要登山記録を原典のまま網羅、収録したもので、完成に漕ぎ着けるまで三年の歳月を要した。

最初この企画が小学館の前芝茂人氏(本会々員、同志社大山岳部OB)より小生へ持ち込まれたのは、昭和五十六年の八月のことであった。

この時の企画では日本全国の主要な山岳の登山記録集ということであったが、それではとても小生一人の手に負えるものではなく、取りあえず日本アルプスを中心とした初登頂、初登攀の記録をまとめてみることにし、たたき台としてのリストアップを始めた。

資料は九分通り手元に揃っていましたが、無いものは伝手を頼ってすることに、一巻三百五十ペー

ジ前後のものとしてリストを作ってみたところ、二十一冊という大部なものとなった。前芝氏からはとにかく小生の思い通りのものを作ってほしいと強い申出があり、いやおうなくこの大作業と取り組むこととなってしまった。

作業はリストに従ってコピーをとり、これを原稿校正して写植にまわすという段取りであったが、問題は原稿校正であった。主として学生の書いたもので文章のうまい、へたはともかく誤植が多く、ことに数字のミスには手を焼いた。ガリ版ずりのものなど判読に苦しむものも多く、また年の記入のないものがほとんどで、この確認がひと苦労であった。大学山岳部など年度で書いてあり、たと

までほとんどの方が初めて目にする記録も多いことと思うし、また当然発表されなければならぬもので、未発表のものもいくつかが新しく書いていただいた記録があり、この点はこの「大成」の価値を一段と高めたものと考えている。

本会協賛のもとに、三田幸夫、西堀栄三郎、今井田研二郎、田口二郎、望月達夫の諸氏のご協力を得て、「大成」の完成したことに肩の荷を下した気持ちである。記録の収録に当り、直接御協力いただいた岡本恒夫、近藤信行、斉藤一男、広瀬誠、佐伯郁夫の各位にあたためてお礼を申し述べたい。なお収録した記録の一部に著者、あるいはご遺族の方へ連絡のつかないままのものがあり、お気付の方は同朋舎へご一報いただければ幸いである。

★「日本登山記録大成」全二十巻、昭和五十八年十一月三十日、同朋舎発行、定価二十万円

目下特別価格で発売しており、希望者は同朋舎出版販売、京都市下京区中堂寺鍵田町二(電〇七五―三三三―〇七四五)または千代田区内神田二一八―一(電〇三―二五六一―二八六六)へ問い合わせればよい。一般書店では取り扱っていない。

藤田弘基写真集

ヒマラヤの花

であらう。富樫誠・泉広昌両氏による一つ一つの花について親切な解説があり、また尾形・菊池両氏による東ネパールの地図も添えられていてわかりやすい。

著者は花を主役に色鮮やかなヒマラヤ絵巻を、一篇の抒情詩にまとめたかったと言っているが、あのきびしい状況のヒマラヤの高地で撮影するのは大変な苦労があったと思われる。しかしこの本を見る限りその苦労は表にあらわれず、とてつもなく美しく壮大なヒマラヤの詩がきこえてくる。せまこましい日常生活の中に、さわやかな自然の息吹を吹きこんでくれる本といえる。

一口にヒマラヤといっても南と北では異なり、さらに高度によっても異なるので、植生も極めて複雑多彩である。本書の撮影場所は専ら東ネパールに限られているが、今後、中・西部ネパール、あるいはカラコルムまで撮影場所をひろげ、さらにヒマラヤ北部に位置する中国の西藏・青蔵・四川・雲南地区などにおいて、このような写真が撮影されるならば、植生のつながりまで明らかとなつて、極めて楽しいシリーズ写真集となるのではなからうか。

A4判、アート写真ページ、花の解説地図等五六ページ、昭和五十七年十一月、白水社刊、定価九五〇〇円

(中村 あや)

・ルーム誌

12月

3日(土)	支部長会議 年次晩餐会
5日(月)	理事会
6日(火)	集会委員会 婦人懇談会
7日(水)	カンチエ委員会 学生部
8日(木)	忘年会
9日(金)	総務委員会 集会委員会
12日(月)	婦人懇談会
13日(火)	三水会
14日(水)	カンチ委員会
16日(金)	青年懇談会忘年会 委員会連絡会
19日(月)	自然保護委員会 婦人懇談会
20日(火)	科学研究委員会 カンチ委員会
21日(水)	図書委員会
22日(木)	フィルム委員会 カンチ委員会
26日(月)	今月の来室者37名
27日(火)	

昭和五十九年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄
編集代表 皆川完一

電話東京(261) 四四三三
振替口座東京三一四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂